Anemprical study for Learaned Helpness-forcoused on the analysisi of causal attribution processes

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/4685

氏　　名	荒　木　友希子
本　　籍	石川県
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	社博甲第28号
学位授与の日付	平成13年３月22日
学位授与の要件	課程博士（学位規則第４条第１項）
学位授与の題目	学習性無力感に関する実証的研究　－原因帰属過程の分析を中心に－ (An empirical study for Learned Helplessness-focused on the analysis of causal attribution processes)
論文審査委員	委員長　小　牧　純　爾 委　員　山　形　恭　子，大　井　　学

学位論文要旨

失敗経験を繰り返すことによってその後の新たな学習が阻害されるという学習性無力感に関する研究は，幅広い領域において取り上げられている重要なテーマである。しかし実際には，学習性無力感研究から得られた知見が教育・臨床などの現実場面に対して直接適用されることはほとんどなかった。本論文では，米国で提示された改訂学習性無力感理論を日本の教育・臨床場面に適用することを目的とし，多面的なアプローチによって改訂学習性無力感理論に関する実証的な基礎研究をおこなった。

第１章では，1960年代から近年までの学習性無力感に関する歴史について概観した。第２章では，これまでの学習性無力感の研究に関して以下の３つの問題点を指摘した。第一に，改訂学習性無力感理論に関して日米間で研究結果が異なっているにも関わらず，日本での研究は充分蓄積されているとは言い難いこと。第二に，原因帰属過程に影響を与える社会文化的要因に関して，改訂学習性無力感理論に立脚した実証的研究はこれまで行われておらず，帰属因の理論的分類が具体的にどのような要因によって影響を受けているのかは明らかにされていないこと。第三に，原因帰属と無力感との関係についてはこれまで多くの研究が行われているが，適用可能性の観点から改訂学習性無力感理論を新たな展開へつなげるための知見の蓄積は不十分であること，である。

これらの問題点を解決するため，第３章から第５章において，多面的なアプローチを用いた６つの実証的な研究を報告した。

第３章では，改訂学習性無力感理論の妥当性について，日本人を対象に検証した。

研究１では，日本では十分に行われていない実験的研究によって理論の妥当性を検証した。その結果，日本人大学生を対象に実験的手法を用いた場合，統制不可能な出来事の原因を内的に帰属するほど学習性無力感効果は強く生起することが確認された。

研究２では，帰属次元（内在性・安定性・全体性・統制不可能性次元）と帰属因（努力・運）との関係に焦点を当て，帰属因の理論的分類に関する妥当性を検証した。その結果，運は外的かつ統制不可能なものとして，また，努力は外的かつ統制可能なものとして認識されていた。これは理論的分類と一致しており，内在性次元と統制不可能性次元に関する努力や運といった帰属因の理論的分類の妥当性が確認された。

研究２の結果から，努力は外的かつ統制可能なものとして捉えられることが示されたが，帰属因の理論的分類がどのような要因によって影響を受けているのかについて具体的に明らかにされていない。

そこで，第４章では，帰属因の解釈に影響を及ぼす社会文化的要因として，学業達成動機づけの程度（研究３），および，日本および米国の文化の差（研究４）をそれぞれ設定し，検討をおこなった。

研究３では，学業達成動機づけの違いが帰属因の解釈に与える影響について検討した。その結果，動機づけの高い生徒は失敗の原因を自分自身の学習態度に帰属させる傾向が強くみられ，動機づけの低い生徒は課題の困難さ，教師の性格や教え方，自分自身の能力や興味の欠如といった外的な要因に失敗の原因を帰属させる傾向が強くみられた。

研究４では，日米間の文化差が帰属因の解釈に与える影響について検討した。その結果，内在性次元において日米間における帰属因概念の差異が明確に表れ，失敗の原因を努力や能力に帰属することの意味は，社会文化的要因の影響によって日米間で異なっていることが明らかになった。

第５章では，適用可能性の観点から改訂学習性無力感理論を精緻化するため，他の領域で得られている知見を統合することによって，適用可能性を考慮した改訂学習性無力感理論の精緻化に有益な証拠を提供することを研究目的とした。

研究５では，認知療法の臨床現場から得られた知見を統合し，原因帰属の多様性の検討をおこなった。その結果，失敗場面での多様な帰属は無力感の生起をもたらさないことが明らかにされ，また，多様な帰属因を考えることのできる人は無力感に陥りにくいことが指摘された。

研究６では，絶望感理論，社会的学習理論，および，自己効力感理論から得られた知見をふまえ，人格特性としての内的統制感や効力感，期待概念としての結果期待や効力期待，各領域の主観的価値および成功経験，の各要因が中学生の無気力状態にどのように関与しているか検討をおこなった。その結果，無気力を強く感じている生徒は，成功をあまり経験しておらず，また，内的統制感をあまり感じていなかった。また，無気力感をあまり感じていない生徒は，効力感を高く保持していたことも明らかにされた。無気力感を強く感じている状態から回復するには，やればできるという内的統制感を向上させること，また，ストレス耐性を持ち，無気力感を感じていない状態を維持するためには，自分には行動する力があると信じる効力感を持っていることが必要となると思われる。

最後に，第六章では，著者のおこなった研究をまとめ，総括をおこなった。現実場面への適用を考慮に入れて改訂学習性無力感理論を精緻化するためには，実験的手法による実証研究を蓄積する必要があること，統制不可能性および内定帰属の概念に関する詳細な検討を行う必要があることが示唆された。

Abstract

After experiencing uncontrollable events, organisms expect future uncontrollability and show symptoms of helplessness such as cognitive, motivational and emotional deficits. This phenomenon is called learned helplessness. Although learned helplessness has been investigated in many psychology related areas, there has been little study about abpplication for daily problems. This research aimed to give details of the re-formulated learned helplessness theory (Abramson et al., 1978) by considering application in educational and clinical areas.

Six empirical studies were conducted for this purpose.

Study 1 and Study 2 were designed to examine the validity of the theory. Results from Study 1 using experimental methods showed that internal attribution for failure was critical for the occurrence of learned helplessness. Results from Study 2 showed that effort was rated as an internal and a controllable factor while luck was an external and an uncontrollable factor.

Study 3 and Study 4 were designed to examine the effect of socio-cultural foactors against the interpretation of attributional causes such as effort, luck, and ability. Results from Study 3 showed that the cognition of cotrollability was affected by differences in motivation for achievement. Results from Study 4 showed that American undergraduates recognized ability as less internal than Japanese did.

Study 5 and Study 6 were designed to integrate knowledge from other areas. Results from Study 5 and 6 showed that the variety of attribution, self-efficacy, and locus of control were critical for the occurrence of helplessness.

学位論文審査結果の要旨

度重なる失敗や予想もしなかった不幸や災害にさらされ，ストレスの事態を繰り返し経験させられると，その結果として人が気力の減退，認知能力の低下，食欲不振などを顕著な特徴とする「うつ症状」または「うつ病」の状態に陥ることがある。この心的障害の本態を解明し，それへの対処法を開発して行くことは，精神医学のみならず，心理学，特に臨床心理学に課せられた重要な問題であり，これまでに様々な研究が試みられてきている。最近では，そのなかの「改訂学習性無力感理論」のアプローチが注目されている。

この理論は，対処不可能な電気ショックに繰り返しさらされたイヌが，この外傷体験の結果として，動因や認知能力の低下に陥り，その後の課題事態に合理的に対応することが困難になるという「学習性無力感」の実験的知見にもとづき，Seligman 達が，人のうつ症状，またはうつ病を説明するためのモデルとして，彼らの古典的「学習性無力感理論」を補強し，改訂した理論であるが，確かな実験的事実と学習の一般原理に基礎をおいた理論であることなどから，見込みのある理論として注目され，そのさまざまな側面についての検証研究が行われてきている。

荒木は，最初の実験研究において，人における学習性無力感の証明にわが国の研究者として初めて成功して以降，改訂学習性無力感理論の臨床的適用に関わる基礎的な問題について，専心的に研究を進め，６つの実験・調査研究を遂行してきている。荒木の論文はこれらの研究成果を報告したものである。荒木は，まず論文の第１章において，改訂学習性無力感理論の研究史を展望した。そして，第２章において，自らの問題関心に沿った研究テーマの整理を行い，自らの研究を展開した経緯についての要約を示し，第３章以降においてその研究成果を提示している。

荒木は，まず，改訂学習性無力感理論の妥当性に関わって，２つの実験研究を行った。研究１においては，日本人大学生を実験の被験者に用い，統制不可能な出来事を内的に帰属させる被験者ほど学習性無力感が強く生起するという，理論を支持する結果を得た一方，既存の質問紙（EASQ）による原因帰属スタイルの評定には妥当性に疑問があることを見出した。次いで，荒木は，研究２において，改訂学習性無力感理論の基本原理である帰属次元と帰属因の妥当性について，faking の方法を用いて検討を行った。理論を支持する結果を得た一方，被験者によっては努力という帰属因を外的かつ統制可能な方向に評価する傾向があることを見出し，努力概念の見直しが必要であることを指摘した。

こうした妥当性研究の結果を受け，荒木は帰属因の認知を規定する社会・文化的要因の分析に着手し，研究３において，進学率に差のある高等学校の生徒に対する質問票調査を行い，学業達成動機の強い生徒は失敗を内的に帰属させる傾向があり，低い生徒は外的な要因に帰属させる傾向があることを見出し，努力概念の内容は人を通じて一律ではなく，達成水準によって左右されることがあることを明らかにした。帰属因の解釈の多義性に関する証拠を集めるため，荒木はさらにアメリカに留学中の研究者と共同し，アメリカの大学と本学とで併行して質問票調査を行い，アメリカの大学生は能力を日本人大学生ほど内的なものとして理解していないなど，原因帰属因の理解に日米間で差があることを発見した。この調査結果は昨年のストックホルムで行われた第27回国際心理学会議で報告されている。

荒木は，さらに，改訂学習性無力感理論とその他の理論，特に絶望感理論，社会的学習理論，および自己効力感理論との理論的関連性を視野に入れた調査研究（研究５）を行い，多様な原因帰属を行う短大生は学習性無力感に陥る傾向が少ないことなどの注目すべき事実を発見している。荒木は，さらに，研究５において中学生の効力感，効力期待，無気力感などの指標に関する質問紙調査を行い，成功経験と内的統制感との間には正の関係があり，無気力感と効力感との間には負の関係が見られることなど，将来の研究の出発点となる貴重なデータを得ている。なお，荒木のこれらの研究成果は，11回の学会報告，１つの学術雑誌論文，３つの紀要論文としてすでに公表されている。

荒木の研究は，改訂学習性無力感理論の臨床的適用に関わって，体系的な検討を必要とする問題が

いくつも存在することを明確に指摘するとともに今後の研究の方向を明示しており，その成果は有意であると評価することができる。しかし，改訂学習性無力感理論という複雑な理論に対し，多様な問題にわたってやや性急に取り組んだことから，研究成果の中に一般性の確認の不充分なものがあることが指摘される。理論の難点を明示するためにはそれに矛盾する事実を証明するだけで充分であるが，問題に関する整合性のある理解に到達するためには，事実そのものの体系化と一般性の確認が必要である。今後の研究に期待したい。

若い研究者にありがちな研究を進める上での性急さはあるものの，豊富な着想にもとづき，精力的に多様な研究を推進し，その結果として，有意な研究結果を得ていることなどから，荒木の研究は博士論文の研究として充分に水準をクリアしていると評価し，３名の審査委員とも一致して合格と判定した。